



相模原市が主催している文化事業

フォトシティさがみはら

相模原市総合写真祭



vol.1

TOPICS

ふな お おさむ

## 江成常夫賞 受賞者・船尾修さん

の活躍が すごいっ

DOCUMENT! 記録!

EXPRESS! 表現!

MEMORY! 記憶!

江成常夫さんは中央区田名在住。「昭和のかたち」を半世紀以上に江成常夫さんわたり見つめて、写真の記録性の意味を深化させてきた日本を代表する写真家です。フォトシティさがみはらは20周年を迎えた2022年に新たに江成常夫賞を創設しました。5年ごとの周年事業にあわせ、その期間プロの部受賞作品の中より記録性等の視点から最も優れた作品を顕彰する特別賞です。その栄えある第1回には第16回に受賞された船尾修さんの「フィリピン残留日本人」が決まりました。船尾さんは、2009年には「カミサマホトケサマ」で第9回さがみはら写真新人奨励賞も受賞されており、まさにフォトシティが見守り続けている写真家なのです。



初の江成常夫賞受賞写真家となった船尾さん。2023年3月には土門拳賞（毎日新聞主催・毎年1～12月に発表されたプロ・アマ問わずの写真賞）の受賞が発表されました。いち早く注目してきた写真家の活躍に胸躍る思いで、船尾さんへの期待がやみません。



写真集「フィリピン残留日本人」から

土門拳賞の受賞対象となったのは写真集「満洲国の近代建築遺産」。右の写真は、4～5月にかけて開催されたニコンプラザ東京 THEGALLERYで（新宿）開催された受賞作品展。日本を遠く離れた地で生きる人々の記録から「満州」という「昭和のかたち」の象徴である地に足を運び記録する船尾さんは、江成さんの精神性を継ぐ者の姿かもしれません。

記憶と記録

往来する写真家



■ 船尾 修さん

1960年神戸市生まれ。アフリカ大陸での2年間の放浪旅行を転機に写真表現を志し独学でフリーランスの写真家となる。大分県国東半島に「半農半写」の生活。

フィリピンには戦前より多くの日本人が移住。戦場となり激しい反日感情の中、戦後もひっそりと生き抜いて教育も受けず国籍を失いながらも日本人らしさを失わずに生きる姿を2008年から6年間にわたり現地を訪ねて記録した写真集が江成常夫賞受賞になっています。



相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら実行委員会  
事務局：相模原市文化振興課 TEL 042-769-8202